

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第一種郵便物認可
平成十九年一月一日発行（毎月一回）三全行
第十二巻第九号（通巻第 一九三号）

鈴



ぐるっけ

新春号

俳句雑誌

GLOCKE

第153号

1. 2007

謹賀新年

縫初め

品川鈴子

初鏡 屈^く背^ぐの癖を 糺^{ただ}したり

エプロンのまま屠蘇祝ふ独り言

初日射しソーラー鈴の鳴りしきる

縫初めの胸元につと預け針



縫初めの針穴めどに絹糸もたつきぬ

絹糸の紅を弾はじきて針始め

雪雲の上に吊籠ゴンドラガラス拭き

電トル気マリ石レン檜ノの初湯きらめかす

初風呂に容れヒマラヤの電気石

初夢のゆくてを臥牛占めたる



玉鈴

香川 合川月林子

秋冷や靈安室の扉の重き
冷やかな裾が返る鍾乳洞
何事も控へ目に生き秋遍路
大花野ここにも風の道があり
美術展画布をはみ出す裸婦の像

大阪 赤木 真理

食卓をミシン机にかな女の忌
糸調子きつきミシンや今年絹
煮染芋縫ひ物の手をふと止めて
ボタン穴せつせとかがり葛の花
新絹を裁ちて心の迷ひ失せ

兵庫 秋田直己

降り立てばシカゴ空港秋深し
秋澄みて裏参道も賑はへり
波静か湖面に写る初紅葉
秋冷の橋の袂に異人僧
秋深し鳥の餌にとパンの耳

吟

大阪 尼寄太一郎

指竹篋する子される子野路の秋
残暑見舞彼に俳画の隠し技
引揚げの姉にマンゴの見舞籠
川床に籠盛り弁当七七忌
高々と抱かれ両手で梨を挽ぐ

兵庫 荒木治代

場違ひの席まぎらはす秋扇
もてなしの梨に話の止めどなし
運動会どん尻走る子に拍手
分け入れば萩のとりまく墓どころ
秋の雨路肩注意の七曲り

大阪 池田かよ

虚しさの塊となり夜の長き
稲妻の一閃獨りが怖くなる
マンシヨンの寝しづまりたり星月夜
大ひさご残りて下がる野分あと
太陽がいつぱい柘榴実がはじけ

大阪 石橋 萬里

本番に脆きかけつこ鯛雲
運動会靴片方の落し物
五階より鸚哥^{インコ}が落す柿の種
澄む水に魚群が突^つく河馬の尻
白熊は浮き板齧り歯を磨く

愛媛 今井 忍

校長もフオークダンスや運動会
乱れ萩括り石工は仏彫る
下校児に川原のずすこ熟れにけり
露草の白根が透ける試験管
痰を取る看取りの妻やちちろ鳴く

香川 齋部 千里

稲刈りの農婦脚より老きざす
松手入れ庭師要に鉢入る
よき距離を隔て手入れの松を見る
祭獅子後退をして舞ひ納む
秋蝉のむくろ転がる神楽殿

兵庫 浮田 胤子

よく回る木ノ実独楽子は抽出しへ
赤い羽根新閣僚に若さあり
鈴生りの柿の木は娘と同ひ齡
着ぶくれて小ざっぱりと縁遠し
いただきぬお化けの様な大き柚

兵庫 馬越 幸子

松手入松の匂ひの鉢拭く
手入松頭でつかち直りたる
ゴムボート着け林泉の松手入
演目に這ひ這ひ競争運動会
運動会薬缶の水で線を引き

大阪 大井 邦子

輿飾り控へ芋莖に薦被せ
総生りに絵馬掛け子らのずいき輿
物知りの児ら口々に鯛雲
藁ポッチ立つて賑はふ明日香村
自転車ブレーキキコキコ稲香坂

薬草歳時記

(一五二) ハハコグサ (母子草)

大音悦子

春の七草の一つでおぎょうのこと。どこでもみられる雑草のひとつだが、日当たりのよい肥沃な土地のハハコグサは草丈が30cmもあり、わたしの好きなかわいらしい母子草のイメージとはかけはなれた姿でガツカリする。

ハハコグサは漢名を鼠麴草というが、他に30余もの異名がある。

冬を越したハハコグサの若芽を摘み、よくゆでて細かく刻み餅や団子につきこむ。近似種に、チチコグサや帰化植物のチチコグサモドキがあるが山菜としては利用されない。

ハハコグサは葉にある綿毛が邪魔になり口にカスになってしまったてしまい、いつまでたつても飲みこめないという。蓬の方が色もかおりもよいので、今ではヨモギが餅草として主流である。

性味は甘・平・温。無毒。婦経は肺経。肺中の寒を除く。寒のための咳と痰を治す。

マウスに濃いアンモニア水を吸入させ慢性の咳嗽を起こ

し鼠麴草の煎液を内服させたとところ一定の止咳作用があった。

開花期に全草を摘み取り水洗いの後乾燥する。主に鎮咳去痰に有効で、利尿作用もある。

咳止めには一日10gに水200mlを加え、半量になるまで煎じ、三回に分けて服用する。あるいは、よく乾燥した全草を細かく切って一回20gを火にくべ、立ち上がる煙を吸つてもよい。

扁桃腺炎には全草10gを煎じてうがいをする。急性腎炎には煎液を食間に飲むと利尿効果がある。

たむし・しらくも・はたけなどの皮膚病には、全草を適当に切り、塩をまぜて濡らした和紙に包み、これを炭火の中に入れて黒焼にする。この黒焼をすりつぶしてゴマ油で練つたものを患部につける。

いづれも過度に使いすぎてはいけない。使いすぎると目を損傷することがある。

全草にルテオリン・モノグルコサイド・フィトステロール・無機物の硝酸カリを含む。

ハハコグサは干してドライフラワーにするとよい。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「野外ハンドブック」山と溪谷社

「漢方医学大辞典」雄渾社

「中薬大辞典」小学館

「食べられる山野草」主婦と生活社

著者略歴 神戸薬科大学卒

ハハコグサ (オギョウ、ホウコグサ) [ハハコグサ属] (きく科)

Gnaphalium multiceps Wall.

母子草、(中)鼠麴草

1月~2月



須賀悦子画

薬用部分: 全草
鼠麴草 <ツキクソウ>



開花期に全草を水洗い日干し乾燥

花期:
4月~6月



E.S.

| | | | | | | | | | |
|-----------------|---------------|--------------|-------------|----------------|-------------|---------------|---------------|----------------|----------------|
| 御形摘む児らは小川を飛び越えて | 母子草なりの小さき絮とばす | 目鼻寄せ羅漢が笑ふ母子草 | 母子草焦土は今も草の底 | 鶏の目には鶏の世あらむ母子草 | 石垣は弾痕ふかし母子草 | 菩提寺へ母の手を引き母子草 | 母子草やさしき名なり荅もち | 老いて尚なつかしき名の母子草 | 母子草すぐに野宿がたばこかな |
| 塩出 眞一 | 田畑美穂女 | 有馬 壽子 | 田川飛旅子 | 加藤 楸邨 | 水原秋桜子 | 富安 風生 | 山口 青邨 | 高浜 虚子 | 齋部 路通 |

ぐらっけ

鈴の奏

品川鈴子選

六甲の猪すれ違ふ宮参り 兵庫 唐鎌光太郎

秋日濃し人もまばらな朱塗塔
そぞろ寒剥がれ舗道につまづきて

秋灯家出少年戻らざる

地球儀に闇あり灯火親しめる 兵庫 中村 碧泉

虫を聴く昔任地の坊泊り

秋風のうごくのれんに「ゆ」の一字

仕方なささうに添水の叩くなり

空耳にあらず師の声秋風鈴 鹿児島 尾崎 久子

流水を四角に切つて新豆腐

月の道どこかにアガサクリスティー

追伸のやうに影くる赤とんぼ

鈴虫や 庄屋の松に刀傷 兵庫 伊勢ただし

終バスに遅れ林道星月夜

友去りし家の周りに赤蜻蛉

スコアボードの縁に半月甲子園

居酒屋の品書きあらた初秋刀魚 東京 片野 光子

しなやかに猫の屈伸花芒

乳母車降りる降りると花野の児

野良猫と潜つて居りぬ萩の道

秋の蚊にわつと囲まる高野墓地 兵庫 村田とくみ

ひび割れし光秀の墓秋の蝶

人みしりする子手火花大好きと

バス出口転げし西瓜止まりけり

虫籠をゴルフバッグにのせてあり 兵庫 土屋 利之

原人の骨出し浜の花火あと

釣り上げし鯊遊ばせる忘れ潮

別所氏を助けし商の新走

風鈴は小さな楽器音豊か 兵庫 伊藤 公女

風鈴をみがいて仕舞ふ午後一人

通天閣見下す町に秋の色

教会を見上げるベンチ虫すだく

台風に降り籠められし旅三日 神奈川 永塚 尚代

からす瓜山守る人減りしとや

秀 鈴 記

六甲の猪すれ違ふ宮参り

唐鎌光太郎

六甲辺りの高台の住宅池は大阪湾を一望する眺めが抜群。その代わり思いがけない野生動物に出くわすこともある。

産まれた児が初めて産土神うすまのみに参詣する日、装いも美々しい家族を目がけて、ひよっこり現れた猪。勢いづいた獣は縁起がいいが、赤子をかばって慌てふためく晴着の人達。その様子が鮮明に見えるようで笑みを誘われる。

仕方なさきうに添水の叩くなり

中村 碧泉

万事が電化されて、身辺から手作りの道具が殆んど消え失せた。能率一辺倒の当世では、何となく時間に追われている気分。久しぶりに聞く添水は、まるで成り行き任せに、竹筒に水が溜まれば反転して鳴り、水涸れには休みくくの力学に適いつつ鳥威しの役も果たす。辺りの静寂を際立たせて雰囲気さえ統べる。聞き手次第で印象も様々に融通無碍げな道具の柔らかい音。味気ない日々と比較すると、添水のような生き方も悪くはない。

巻頭 三句 品川鈴子 評
四句く十五句 佐田昭子 //

*選句は全て 品川鈴子

流水を四角に切つて新豆腐

尾崎 久子

これも器械製では無く、昔ながらの手法の豆腐。作りたてのふんわり固めた新豆腐を豊かな水に木杵毎浸し、笥からの流水に沈めた豆腐を、粗切しそつと掌に掬い載せて、手際よく包丁を縦と横に使うと、大きな塊が見る間に家庭用の豆腐片となって、水に放たれ漂う。その包丁捌きは、流れて留まらない水を、すいすいと縦横に刃を通して切るようだ。豆腐の抵抗のない柔らかさ、新豆腐ならではの質感が伝わってくる。

友去りし家の周りに赤蜻蛉

伊勢ただし

友人は引越されたのか、あるいはお亡くなりになったのか、友との思い出のある家の周辺には赤蜻蛉が群れている。暑い夏も終り秋が来たが、友はもうここにはいない。出会いがあれば又別れもいつか訪れる。

居酒屋の品書きあらた初秋刀魚

片野 光子

俳句や連句の会が終わると夜は居酒屋に繰り出す機会も多い。秋になり沢山の品書きの中に秋刀魚の字を見つけさっそく注文する。最近昼食時に営業する居酒屋も多く、旬のものを食べたくなると、私はレストランより居酒屋へ行くようになり、もしかして作者も気軽に居酒屋へ……と楽しく想像した句。

秋の蚊にわつと囲まる高野墓地

村田とくみ

和歌山県北東部にある千メートル前後の山に囲まれた真言宗の霊地。空海が自らの入定地として下賜を受け、真言宗の総本山金剛峯寺を創建。高野山の墓所、霊廟は初めての人にとってあの世とこの世の迷路。わつと秋の蚊に囲まるとは高野墓地ならではの実感の句。

虫籠をゴルフバッグにのせてあり

土屋 利之

ゴルフバッグの上に虫籠をのせてあるだけかもしれないが、やさしい御祖父ちやまが孫の為にゴルフに行ったら虫を採って来てあげようと思っていらいっしやるのかと楽しく想像した。

通天閣見下す町に秋の色

伊藤 公女

大阪市浪速区の歓楽街「新世界」の中心にある高塔。そこより見下ろすにぎやかな街にも秋の訪れを感じる。秋の色と置いたことよって、東京にいと通天閣なじみが薄いのでどんな秋の色だろうと想像が広がった句。

山側に体傾け霧の道

永塚 尚代

登山をしていて霧が立ち籠めてくると、自分で自分の歩いている道から谷の方へ吸込まれそうで大変不安になる。出来るだけ山側にと意識して歩いている様子が、俳句なればこそその簡略な表現に佳く出ている。

余部の枕木高し秋桜

国永 靖子

兵庫県の日本海岸、山陰本線鏝く余部間の鉄橋。全長三〇九メートル、高さ四一・五メートル。山陰海岸国立公園の景勝地余部。硬質なものを枕木高しと詠嘆して下五に秋桜を配した構図の見事な句。(以下略)